

第3章 教育研究活動

1 教育研究活動の考え方

本学開学の平成14年に、新潟県立看護短期大学の学生募集は停止されたが在校生の教育は16年度専攻科学生の修了式まで行われる。

新潟県立看護短期大学教員は、短期大学から新設看護大学に採用された教員と、新規採用の全教員が短期大学を併任して進めてきた。いうまでもないが、新潟県立大学の全教員が大学教育に携わって、まだ3年である。この中で、本学固有の教育研究実績を評価しようという試みは必ずしも適切ではない。本章では、教育研究活動における教育の取り組みの経過を中心にまとめている。

2 教育研究活動の理念と目標

本学では、学問の功利的な追求や研究業績がこの観点に偏って進められることや評価されることを厳に慎みつつ、現実に立脚し、本学が使命とする「地域文化に根ざした看護科学の考究」に取り組む。すなわち、看護実践の具体的改革が公共の利益になる「実践の理論化」「理論の実践化」を目指し、新潟県域のヘルスケアの課題を学問として普遍性のあるものへと発展させることを意図して研究活動を進める。また、利用者の健康や看護活動を改善していく立場から県内の看護人材の質を向上させ、現地との共同研究活動に取り組み、その中で学生の実習指導や、実践を担当する看護職の資質の向上を図る。

3 研究活動の推進

1) 海外研修事業

本学開学にあたり、本学教員が看護教育研究を推進し、近い将来には国内外のピアグループとの共同研究・交流が進むことを意図して、中長期海外研修事業を進めてきた。平成14年度、15年度、16年度各年の予算額は150万円であった。研修参加者は以下のとおりである。

平成14年、15年、16年度海外研修実施一覧

| | 氏名 | 研修目的 | 主な研修先 | 期間 |
|--------|-------------------------------|---|---|---------------------|
| 平成14年度 | 富川孝子 教授 加固正子 教授 山本淳子 講師 | アメリカ大学教育における精神看護学、異文化看護学に関する研究 | ワシントン大学、シアトルパシフィック大学 | 平成15年3月24日～4月5日 |
| | 吉山直樹 教授 | サンディエゴ大学における国際交流の現状と姉妹校締結に関する調査研究 | サンディエゴ大学看護学部他、国際施設 | 平成15年3月14日～4月5日 |
| | 深澤佳代子 教授 酒井禎子 講師 | アメリカの看護教育カリキュラムの特色と実習教育の具体的展開に関する調査 | トマス・ジェファソン大学、ペンシルバニア大学看護学部、メイヨー・クリニック | 平成15年3月18日～3月27日 |
| | 橋本明浩助 教授 | シンガポール看護師の情報教育及び医療情報器材の視察 | シンガポール大学病院及びフナンセンター、シムリムタワー | 平成15年2月5日～3月3日 |
| 平成15年度 | 野地有子 教授 | 日米共同研究「Women's Health and Self-Care:Focus on Menopause」の実施 | サンディエゴ大学及び関連施設 | 平成16年3月6日～4月6日 |
| | 深澤佳代子 教授 | ①米国におけるリスクマネジメントの視察と日米間の比較、②リスクマネジメント研究の情報収集 | メイヨークリニック | 平成16年3月10日～3月29日 |
| | 北川公子助 教授 | ①高齢者のセルフヘルプグループ、②ターミナルケア、③看護教育プログラムに関する視察・研修 | ポートランド州立大学及び関連施設 | 平成15年12月19日～3月17日 |
| | 井上みゆき 講師 | ①大学・大学院における看護学教育プログラム、②病院でのCNSの役割と実践、③NICUの看護の実際、などについての視察・調査 | ハワイパシフィック大学 ・Kapio lami Medical Center for Women & Children ・Honolulu shrimers Hospital for Children ・Saegusa clinic ・Futatugi clinic | 平成15年12月14日～3月11日 |
| 平成16年度 | 酒井禎子 講師 | 第13回国際がん看護学会学術集会での演題発表及び諸外国のがん看護実践の現状と研究の動向についての情報収集 | オーストラリア、シドニー | 平成16年8月6日～8月13日 |
| | 和田佳子 講師 | 英国における母子保健及び分娩事情や妊産褥婦のケアならびに助産教育に関する現地視察・研修 | Royal Collere of Nursing of the UK, Edgware Neve Birth Center, Edgware Community Hospital, など | 平成16年7月26日～9月3日 |
| | 小林恵子 講師 | 英国における子供虐待に関する地域ケアシステムの現状調査及び関連施設視察 | ロンドン看護協会、子供虐待関連機関、エジンバラ(子供・家族ケアサービス機関) | 平成16年7月26日～8月10日 |
| | 堀 良子 助教授 | 英国の感染管理の看護に関して組織化や資格制度、教育視察 | ロンドン市、ウェールズ州、カーディフ、スオンジー市 | 平成16年12月12日～17年3月6日 |

開学3年目であり、短期大学の学年進行中であるなどの理由から、研修に出ることに躊躇する場合もあるが、専門性の質の向上と国際交流を深める意味でも海外研修の趣旨にそって、この制度を有効に活用していく必要がある。16年度には、学会発表のための短期的出張や研修の長期化の希望がみられ、海外研修本来の目的に近づいてきた。FD委員会主催による、海外研修の報告会も開催された。

2) 科学研究費等外部研究補助金の現状

(1) 科学研究費

2年目までの成績であるが、順当な採択状況である。

開学2年目までの採択状況一覧(新規採択分のみ)

| 公募研究種目 | 平成15年度 | | | 平成16年度 | | |
|---------|---------|---------|--------|---------|---------|--------|
| | 応募件数(件) | 採択件数(件) | 採択率(%) | 応募件数(件) | 採択件数(件) | 採択率(%) |
| 基盤研究(A) | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 基盤研究(B) | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 |
| 基盤研究(C) | 7 | 1 | 14 | 6 | 4 | 67 |
| 萌芽研究 | 4 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 若手研究(B) | 4 | 2 | 50 | 3 | 1 | 33 |
| 総計 | 17 | 3 | 18 | 12 | 5 | 42 |

① 平成15年度新規取得分

a) 若手研究B

我が国の看護領域に対するジェンダー分析と、それに基づく看護科学試論の作成

研究者：朝倉京子

研究期間：2003年4月～2006年3月

研究費：2003年120万円

2004年100万円

2005年120万円

体外受精を継続している女性の治療を継続する意思決定の分析

研究者：阿部正子

研究期間：2003年4月～2005年3月

研究費：2003年160万円

2004年60万円

b) 基盤研究B

更年期女性の健康問題の分析と看護プログラムの開発

(前勤務先での取得を継続)

研究者：野地有子

研究期間：2002年4月～2005年3月

研究費：2002年400万円

2003年500万円

2004年500万円

2005年270万円

③ 基盤研究C

特別養護老人ホームにおける痴呆高齢者の終末期の様相と看護ケアの課題

研究者：北川公子

研究期間：2003年4月～2007年3月

研究費：2003年40万円

2004年50万円

2005年50万円

2006年60万円

②平成16年度新規取得分

① 若手研究

介護保険制度下のケアマネジメントにおける介護支援専門員と保健師の協働

研究者：斉藤智子

研究期間：2004年4月～2006年4月

研究費：2004年90万円

2005年30万円

② 基盤研究C

DVD映画を用いたCALLシステムによる看護学生のための英語教育手法の研究

研究者：山本淳子

研究期間：2004年4月～2006年3月

研究費：2004年190万円

2005年150万円

面接時の受診者（クライアント）と医療者の身体姿勢に関する行動学的研究

研究者：吉山直樹

研究期間：2004年4月～2006年3月

研究費：2004年120万円

2005年50万円

看護師による小児救急「電話トリアージ・マニュアル」の有用性

研究者：加藤正子

研究期間：2004年4月～2006年3月

研究費：2004年80万円

2005年60万円

最適化モデルからみた難病家族介護者への看護援助に関する研究

研究者：平澤則子

研究期間：2004年4月～2006年3月

研究費：2004年90万円

2005年90万円

(2) その他の研究費

日本訪問看護振興財団委託研究事業 (平成14年度～15年度)

「在宅痴呆性高齢者ケアの試行的研究」代表

研究者：中島紀恵子 (代表)

研究期間：2002年4月～2003年3月

研究費：300万円

財団法人ぼけ予防協会委託研究事業 平成15年度

「老人性痴呆 (ぼけ) 専門の電話相談全国実態調査」代表

研究者：中島紀恵子 (代表)

研究期間：2003年4月～2004年3月

研究費：400万円

日本看護協会 看護政策立案のための基盤整備推進事業

「痴呆と高齢者を支える現任看護職の教育プログラムの開発並びに研修事業推進のための指導者養成に関する実験的検討」

研究者：中島紀恵子 (代表)

研究期間：2004年4月～2005年3月

研究費：400万円

平成16年度 「電話面談員の教育研修事業」

研究者：中島紀恵子 (代表)

研究期間：2004年4月～2005年3月

研究費：280万円

勇美記念財団2002年度 在宅医療助成 (後期)

「難病としての痴呆要介護者に対する総合的・効率的ケア体制の確立に関する研究」

研究者：中島紀恵子 (申請者)、吉山直樹、服部伸、杉田玄 (共同従事者)

研究期間：2003年3月～2004年3月

研究費：142万円

日本プライマリ・ケア学会 平成14年度課題研究助成

「プライマリ・ケアにおける感染管理—常在細菌の実態からみた在宅感染症にかんする研究」

研究者：吉山直樹 (研究者)、矢島恭一 (共同研究者)

研究期間：2002年11月～2004年3月

研究費：40万円

笹川医学医療研究財団

「がん患者が生きる意味を見いだすプロセスとサポートグループの影響」

研究者：川村三希子、野地有子、小島悦子

研究期間：2002年4月～2003年3月

研究費：30万円

厚生労働科学研究費補助金医療技術評価総合研究事業

「看護師資格試験における良質な問題の作成システム及びプール制導入に関する研究」

研究者：濱田悦子 (代表者) 川原由佳里、吉田みつ子、佐々木幾美、谷津裕子、朝倉京子、樋口康子 (共同研究者)

研究期間：2002年4月～2004年3月

研究費：900万円

文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）（1）

「日本、ブラジル、米国における日系移民の異文化適応問題と精神健康の医療社会学的研究」

研究者：朝倉隆司（代表者）、中山和弘、園田恭一、朝倉京子（共同研究者）

研究期間：1999年4月～2004年3月

研究費：1,360万円

お茶の水女子大学ジェンダー研究センターCOEプログラム

「多様なセクシュアリティに関する研究」（お茶の水女子大学ジェンダー研究センターCOEプログラム ジェンダー研究のフロンティア C班－6）

研究者：根村直美（代表者）、朝倉京子

研究期間：2003年4月～現在に至る。

研究費：（未定）

文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（A）（2）

「日本型がん集学的アプローチのためのケア提供システムモデル開発と評価」

研究者：小松浩子（研究代表者、聖路加看護大学）

研究分担者：射場典子、林直子、中山祐紀子、飯岡由紀子、松崎直子、
中山和弘（聖路加看護大学）安保英勇（東北大学大学院）、
野村美香（日本赤十字広島看護大学）、村岡宏子（東邦大学）、朝倉京子

研究期間：2003年4月～継続中

研究費：420万円（2003年度）

厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策事業

「エイズに関する普及啓発における非政府組織（NGO）の活用に関する研究」

研究者：（主任研究者）池上千寿子

研究分担者：生島嗣、東優子、兵藤智佳、徐淑子

研究期間：2002月～2003年3月

研究費：800万円

厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策事業

「HIV感染予防対策の効果に関する研究」

研究者：（主任研究者）池上千寿子

研究分担者：生島嗣、東優子、兵藤智佳、徐淑子

研究期間：2002年4月～2003年3月

研究費：1,400万円

3) 学長特別研究費等学内研究助成について

教育研究費予算の適正配分によって各教員の研究をバックアップするために学長特別研究費助成を制度化した。運営は、研究交流委員会が担当している。平成14年度配分総額は802万円であり、共同研究12編、個人研究20編を採択した。また、平成15年度配分総額は687万円で、共同研究10編、個人研究15編を採択した。

平成16年度は586万円であった。16年度の新企画として「教育方法に係る研究」を学長の指定

研究費とした。16年度のテーマは「看護専門領域各演習科目に於けるPBLチュートリアル教育研究」である。

初めての取組みであり、各領域とも準備に多くの時間を必要とした。演習項目の調整など負担感が伴ったことは否めないが、教員自身の教育能力開発研究に発展する布石となる可能性が共有された。

4) 看護職との共同研究の現状

各領域の14,15年度における、他施設看護職との共同研究の現状は以下の通りである。

| 領 域 | 共同研究件 | 研究指導 |
|----------|-------|------|
| 母性看護学領域 | | |
| 小児看護学領域 | 3 | |
| 成人看護学Ⅰ領域 | 16 | |
| 成人看護学Ⅱ領域 | 10 | |
| 老年看護学領域 | 1 | |
| 精神看護学領域 | | |
| 地域看護学領域 | 4 | 7 |
| 合 計 | 34 | 7 |

領域によって、共同研究や研究指導の数にばらつきがある。が、それぞれの領域の可能な範囲で、他施設の看護職等との研究の関わりを持っていることが伺われる。完成年度前で、研究フィールドの確保状態でのばらつきであり、今後は、徐々に活性化していくと考える。以下に現在の各領域毎の研究の概要を表に示す。

看護職との共同研究

| 番号 | 研究課題 | 共同研究施設 | 実施教員所属 ・氏名 | 研究目的・方法等 |
|----|---|---|----------------|--|
| 1 | NICUの保育器と看護師の手指の細菌調査 2002年9月 | 新潟県立中央病院 水野貴子、金子美子 新潟県立看護短期大学 高橋初美 | 小児看護学 井上みゆき | 本研究は、現在NICUで行われている殺菌灯による保育器の消毒方法と看護師の消毒液での手洗い方法の有効性を検討した。保育器の消毒前後と看護師の手洗い後の細菌数と細菌の同定を行った。その結果、消毒された保育器からは、細菌検出はなく、現在の消毒方法でよいことが立証されたが、看護師の手洗いは細菌が検出された者もあり、今後手洗い方法の見直しが示唆された。 |
| 2 | 重症障害新生児の治療の停止および制限に関するガイドラインの検討—NICUの看護職者への質問紙調査— 2003年3月 | 長野県立こども病院 内田美恵子 | 小児看護学 井上みゆき | 本研究は、NICUの看護職者が、重症障害新生児の治療の停止および制限に関するガイドラインの必要の是非を問う目的で、小児医療連絡協議会に属する22施設のNICU看護職者へ自記式の質問紙のより調査を行った。その結果20施設590名の有効回答(有効回収率62.6%)が得られた。ガイドラインを必要としている者は、年齢、看護経験、NICUの経験、役職、学歴、倫理教育などの背景には統計的に有意差はなく、479名(84.2%)の者が必要とした。本研究は、成育医療研究「重症障害新生児医療のガイドラインとハイリスク新生児の診断システムに関する研究」(主任研究者 田村正徳)の研究助成によって行われた。 |
| 3 | 重症障害新生児の治療の停止及び制限に関するガイドラインの検討—よりよい決定へいたるための必要条件— 2003年11月 | 長野県立こども病院 内田美恵子 | 小児看護学 井上みゆき | 本研究は、新生児看護学会の交流集会においてNICUに勤務する看護職者を対象に、ガイドラインに必要とする内容の検討会を行った。その内容をICレコーダーにとり、質的帰納的に分析した。その結果、①誰もが明日の命は保障されていないことを前提とする②人権が守られない時の申し出る場を決める③看護職の役割を守る④最新の知識を持つ⑤医療者から意思決定の口火を切らない⑥医療チームで考える⑦死亡した後の親のケアを行う⑧在宅ケアは親の負担を考慮する。以上の内容が必要とされた。本研究は、成育医療研究「重症障害新生児医療のガイドラインとハイリスク新生児の診断システムに関する研究」(主任研究者 田村正徳)の研究助成によって行われた。 |
| 4 | 循環器系疾患患者の自己管理行動および自己効力感に関する影響要因の分析 | 泉野 潔、澤田愛子、高間静子 | 成人看護学 直成洋子 | 慢性に経過する循環器系疾患患者の自己管理行動および自己効力感について各要因との関係や影響する要因を分析した。統計的处理にはSPSSを用いて、相関およびt検定や重回帰分析を行った。その結果、生活管理の主体性や自己効力感を高く認知し、心臓病教室に参加することが自己管理行動を高める効果のあることが明らかになった。また、生活充実感を高く認知し、65才以上の高齢であること、同居者のいることや虚血性心疾患がないことは、自己効力感を高める直接効果となり、自己管理行動に間接的な影響を及ぼしていることが示唆された。 |
| 5 | 日本の都市型保健所における看護活動モデル—プライマリヘルスケアの視点から— | 菱沼典子、田代順子、森 明子、押川洋子、成瀬和子 | 成人看護学 酒井禎子 | プライマリヘルスケアに基づいた看護活動を模索するため、日本最初の都市型保健所である京橋保健館(現中央保健所)における保健師の活動から、健康転換の第1相から第3相で見られる看護活動のモデル化を試み、5つのモデルが見出された。高齢社会においてプライマリヘルスケアに基づく看護を行って行くには、健康問題に合わせて看護活動モデルを選択して使えることが必要だと考えられた。 |
| 6 | 入院生活におけるストレスの実態調査 | 平方静子、熊木留美、川上一美 | 成人看護学 加藤光賢 | 入院生活に伴う患者のストレスについて川口氏らの38項目からなる調査紙を用いて入院患者60名に調査をした。結果以下の8因子が抽出された。情報の欠如、基本的な生活習慣の充足、同室者との関係、侵襲的治療への不安、経済状況の不安、物理・科学的緩急に対する不満、家族への関心、他者からの独立であった。 |
| 7 | ターミナルケアにおけるチームアプローチの理解を促す新たな学習展開の試み—シンポジウム形式を導入した4年間を振り返って— | 射場典子、橋爪可織、小松浩子、川越博美 | 成人看護学 酒井禎子 | S大学ではターミナルケア論の一環として、チームアプローチについての理解を促すために4年前よりシンポジウム形式の学習を展開してきた。初年度と4年目の学生へのアンケートから、学習効果の検討を行った。両群ともに「他職種の必要性とチームアプローチの意義の理解」「現場の声に接することで現実の難しさを知る」といった学びがあり、学生が主体となって計画した4年目には「双方向に学習プロセスが進んだことによる学びの深まり」が見出されていた。 |

| 番号 | 研究課題 | 共同研究施設 | 実施教員所属 ・氏名 | 研究目的・方法等 |
|----|-------------------------------------|-----------------------------|---------------|--|
| 8 | 脳血管障害による身体障害を抱えた老年期にある患者の貼り絵導入時期の検討 | 高野弘美 | 成人看護学 加藤光寶 | 脳血管障害で入院した高齢患者に機能訓練の一貫として貼り絵（コラーージュ）を導入。3名の対象で作業量・内容について分析した。導入時期が3Wからの場合に持続する作業になることが分かった。遅くても、早過ぎても持続の点で問題があり、導入時期は、無理なく、受け入れがスムーズであることで効果が認められた。 |
| 9 | 手術室における羞恥の場面に関する研究 | 横山久子、藤田美佐子、河合千恵子、高野菜穂子 | 成人看護学 加藤光寶 | 手術時における患者の羞恥を明らかにする目的で手術を受けた患者50名（内男28、女22）、平均年齢50.2才、調査期間平成13年12月から14年5月。方法：菅原の羞恥（自減・加害・他者・相互・傍観）を枠組みの調査紙による。羞恥を感じる場面や事柄で性差があった。女性の方が下腹部に関して高い。年代では20代が最も高く、次いで60歳以上であった。特性不安の41以上と以下でほぼ半数。不安の高い方が羞恥に関する反応は高かった。 |
| 10 | 意識障害患者が経口摂取するまでの嚥下訓練援助の検討（JCS2患者） | 島川妙美子、杉山優美子、白倉美咲、高桑陽子 | 成人看護学 加藤光寶 | JCS2桁患者に対して他動的に行う嚥下訓練の有効性について検討した。開口、舌、首、意識レベルを6段階評価。対象3名。開始3週目と6週目で、後者で廃用性の機能低下改善が困難であり、早期からの訓練開始の必要性が示唆された。 |
| 11 | 維持透析患者の自己管理態度と自己効力感の現状 | 尾崎育恵 | 成人看護学 加藤光寶 | 透析治療を受けている患者名の自己管理態度と自己効力感を2日あき体重増加率との関係を検討した。透析患者90名（内男47、女34）。透析歴は平均7.1年。2日あき体重増加率平均4.5%。自己管理態度15.9。体重5%以上・以下、10年未満で4項目で0.37の相関があり10年以上で関係はなかった。10年以上で自己効力感に自己管理態度と自己効力感が見られない場合に5%以内の体重維持が困難であるという結果を得た。 |
| 12 | 低温熱傷発症条件に関する実験的検討 | 山本 昇 | 成人看護学 飯田智恵 | 安全な温罨法の表面温度と継続時間を検討することを目的に、熱によるマウス皮膚の組織学的変化を検討した。銅管を用いた実験では、42℃では5時間、43℃では2時間以上の加温で3～7日後に真皮深部まで壊死に陥った。また、銅管表面をネル布またはポリエステル布で覆った実験では、同じ温度と継続時間の加温処理を行っても、皮膚傷害の程度は、銅管に接触させた場合より弱いという結果を得た。43℃以上または42℃であっても長時間の加温で低温熱傷発症の可能性が高く、低温熱傷を予防するために温罨法の表面温度への配慮と適切なカバーの材質の選択が必要であることが示唆された。 |
| 13 | 燕労災病院における看護師の喫煙の実態調査 | 藤田美香子、五十嵐光子、武石文子、小林亜希子、村山英恵 | 成人看護学 加藤光寶 | 看護師の喫煙行動と煙草に対する態度を検討した。喫煙率27.3%。一般の13.4%より高い割合である。20代看護師の10代からの喫煙開始39.0%は全国50%よりは少ない。禁煙したいと考えているものは72.5%で多くの喫煙者は禁煙を考えている。喫煙者は煙草害について認識している。看護協会の調査とほぼ同じ結果であった。 |
| 14 | 入院期間延長に関する実態調査 | 本宮みどり、牧優子、岡田恵子、渡邊初美、熊木留美 | 成人看護学 加藤光寶 | 内科病棟に入院した患者700名について退院の実態を調査した。結果：入院予定期間よりも退院が延長した患者は約5割。入院延長の日数の平均は16.9日。家族の人数別入院の延長は、6人、3人、2人の順でいずれも50人以上あった。入院延長理由は、治療、経過観察の項目が多かった。早期から退院にむけてのアプローチが必要であることが示唆された。 |
| 15 | 術後3日間の術後疼痛の鎮痛に対応する患者満足度の検討 | 藤田美香子、五十嵐光子、武石文子、小林亜希子、村山英恵 | 成人看護学 加藤光寶 | 人工膝関節置換術後患者9名に対して、鎮痛・その対応の4項目（体位変換・創傷処置・清拭・更衣）に対する患者の満足度を5段階評価で検討した。痛みは48時間に向かってピークとなり、痛みは、72時間で軽減され、看護師の鎮痛対応は評価される。が、軽減の程度は、睡眠の満足感を得られるまでにはいたらない。睡眠の満足状態から逆に痛みの程度が類推される。また、熟眠が得られる鎮痛対策が必要であることも示唆される。 |

| 番号 | 研究課題 | 共同研究施設 | 実施教員所属 ・氏名 | 研究目的・方法等 |
|----|---|--------------------------------|---|---|
| 16 | 手術患者の羞恥に関する研究 | 横山久子、藤田美佐子、河合千恵子、高野菜穂子 | 成人看護学 加藤光賢 | 手術を受ける場合の羞恥を明らかにするために手術を受けた患者90名(内男48、女42)、平均年齢48.3才。調査期間平成13年6月から14年6月。菅原の羞恥(自滅・加害・他者・相互・傍観)からおこした調査。羞恥を感じる場面や事柄で性差があり、女性は腰部以下に関する羞恥が高く、その程度も高い。年齢では20代が最も羞恥場面が多く、次いで60代であった。これは、手術が股関節であることが関係していると思われる。不安特性(STAI)で平均41以上と以下で、不安が高い方が羞恥に関する反応が高かった。 |
| 17 | 継続看護における連携システムの構築:退院状況の実態に関する研究—入院延長の要因の検討— | 本宮みどり、牧優子、小野塚栄子、岡田恵子、渡辺初美、熊木留美 | 成人看護学 加藤光賢、直成洋子、酒井禎子、飯田智恵、樺沢三奈子 | 県内中規模病院に於ける一病棟の1年間の退院患者700名を対象に入院延長群と非延長群を比較し、入院が延長する要因を検討。結果:入院日数は入院延長群35.2、非延長群11.4。2群において明らかに延長群の入院日数は長い。2群間で差が認められたのは、医療的な継続処置で、内容は、血糖測定、注射・IVH、創処置、経管栄養、吸引。社会資源の活用では、MSW、ホームヘルパー、ケアマネジャーの介入。早期からの退院にむけての職種間の連携・指導が必要であることが示唆された。 |
| 18 | 豪雪地帯における高齢者の居宅での保健医療福祉サービスの効果的提供—ITを活用した継続医療・看護ケア(ヘルスケア)の有効・効率的なプランニングの研究 | 服部 伸 | 成人看護学 加藤光賢、深澤佳代子 小児看護学 加藤正子 看護基盤科学 吉山直樹、橋本明浩、大友康博、杉田 収 | 在宅のクライアントに有効かつ効率的なサービスを提供するため、携帯電話を利用した簡易な在宅ケア連携システムの構築を試行した結果についての中間報告。 訪問診療医の在宅患者を対象にヘルスケアサービス提供者9名との間でデジタルカメラ機能付き携帯電話を使用した情報交換を試みた。 訪問診療中の患者総数99例(男31例、女68例)のうち40人について総計61件(画像24、動画3、メール等34)のデータが得られた。静止画像については患者の顔色、褥瘡、カテーテル挿入口の状態等が診断や治療経過を判断するに十分な画質で得られ、適切な対応を迅速に決定できた。文字記述情報(メール)は受信後の即時対応が困難なので、情報を標準化して迅速な利用が可能となるよう検討すべき課題である。 |
| 19 | 外来通院中の糖尿病患者への生活指導効果の検討 | 松田美恵子、木賀直子、郷戸幸子、前田寿美子 | 成人看護学 加藤光賢、樺沢三奈子 | 通院中で、検査データの改善が見られないⅡ型糖尿病患者5名を対象に、通院時に日常生活行動(食事療法、運動療法、薬物療法、ストレス)から成る面接生活指導を3回行い5点評価。生活行動得点とBMI、Bs値、HbA1c値等の経過を検討した。結果:対象者に4項目以上の改善。食事療法得点とBs得点が改善した。運動、薬物、ストレス、の評価とBMI、HbA1cは継続した改善はなかった。改善型、膠着型、Uターン型に分類された。生活行動改善得点の高い場合の2例で、5項目生活行動改善、BMI以外が改善した。行動得点が高い場合の検査値の改善が見られることが分かった。 |
| 20 | 除水能低下で血液透析への移行を自己決定した事例—ロイ適応看護論の4つの様式を用いて— (平成14年) | 新潟県立中央病院、戸田和子、内藤理恵、笠井昭男、島田久基 | 成人看護学 小林優子 | 除水能低下により腹膜透析から血液透析へ移行せざるを得ない患者の経過を考察した、事例研究である。除水状況の変化や患者の心理面の変化を分析した。ロイの適応看護モデルを用い、特に自己概念様式、役割機能様式、相互依存様式から対象を捉えることの重要性が示唆された。移行期にある透析患者の看護援助の資料となりうる研究であると思われる。 |
| 21 | 集中治療室における急性混乱状態の発症とその要因に関する研究—A病院救命センター病室における調査(平成14年) | 新潟県立中央病院、岡田和子、岡村ひろみ、田中浩之 | 成人看護学 小林優子 | 集中治療室における急性混乱状態の発症の実態と関連要因について明らかにすることを目的に行った研究である。SOADスコアを用いて、前方視調査を行った。調査期間は10ヶ月間であった。全体の発症率は19.7%であり、内科系よりも外科系に多く発症していた。年齢、緊急入院か否か、個室かオープンスペースか、挿入ラインやドレーンの数との関連が有意であった。 |

| 番号 | 研究課題 | 共同研究施設 | 実施教員所属・氏名 | 研究目的・方法等 |
|----|--|-------------------------------------|----------------|---|
| 22 | 心臓手術を受けた患者の術後せん妄発症の実態(平成14年) | 新潟県立中央病院、清水恵美、神蔵裕美、片山尚子、宮澤里美、佐伯由香里 | 成人看護学 小林優子 | 心臓の手術後に、せん妄を発症する例が多くある。せん妄発症の評価尺度である、SOADスコアを用いて心臓手術を受けた患者のカルテより、発症状況とその関連要因を明らかにした。心臓手術患者の50.5%に発症しており、年齢、合併症などとの関連が明らかになった。 |
| 23 | 気管内挿管患者の効果的な口腔ケアーイソジンガーゲル水と酸性水の比較(平成14年) | 新潟県立中央病院、片桐小百合、近藤千夏子、深澤ますみ | 成人看護学 小林優子 | ICUにおいて気管内挿管されている患者の口腔ケアを検討するために、イソジנגーゲル水、酸性水を用いたあとの細菌数、舌苔、口臭、PHの変化を調べた。舌苔に関してのみ、酸性水の方が効果的であるという結果であった。 |
| 24 | 看護職員のストレスに関する実態調査(平成14年) | 新潟県看護協会、尾崎フサ子、古川恵子、中村あや子、伊豆シゲ子、中野裕子 | 成人看護学 小林優子 | 新潟県看護協会が、新潟県から委託を受けて看護職員確保対策における看護職員の離職防止対策の一環として、メンタルヘルス対策の基礎資料を得ることを目的に、ストレスに関する実態調査を行った。県下34施設、約4,200名の回答が得られた。NIOSHの職業ストレスモデルを参考に調査票を作成し、その結果を調査報告書としてまとめた。 |
| 25 | 30~40代の糖尿病患者のセルフケア行動を妨げる要因(平成15年) | 新潟県立中央病院、村田颯子、古沢弘美 | 成人看護学 小林優子 | セルフケアのうまくいかない30~40代の成人糖尿病患者を対象に、セルフケアを妨げる要因について探る目的でこの研究を行った。成人期の患者は、社会的な役割を担っており、それがセルフケアの妨げになっていることも考えられた。ベッカーの保健信念モデルを用いて、8事例を分析し結果を報告した。危機感が少なく、行動によるプラス面を認識していない事例が目立った。また、職場において自分が糖尿病であることを表明していない例ではセルフケアが困難になっていた。 |
| 26 | 看護学生の臨床実習受け入れによる看護師への影響と変化ー救命救急センターにおけるマンツーマンでの見学実習を通して(平成15年) | 新潟県立中央病院、救命救急センター | 成人看護学 小林優子 | 救命救急センターにおける看護学実習が導入され、それによる看護師への影響や変化を調査した。実習形態がマンツーマンであるため、ほとんどの看護師は学生の指導に当たることになっている。実習導入1年目、2年目のデータを分析した。看護師は、学生の実習により自己学習が動機付けられていた。しかし、学生の実習は心理的な負担を与えており、緊張感や不安を高めていた。 |
| 27 | 看護職員メンタルヘルス対策推進事業報告書(平成15年) | 尾崎フサ子、古川恵子、中村あや子、伊豆シゲ子、中野裕子 | 成人看護学 小林優子 | 前年度のメンタルヘルス対策の基礎資料として得たアンケート結果をもとに、新潟県内のモデル病院1箇所、研修施設など3箇所において、スタッフ、管理者それぞれを対象とした研修会を開催した。ストレスに気づく、対人関係技術とアサーション、リラクゼーションという内容であった。その実践報告を行ったものである。 |
| 28 | 手術部の安全性をふまえた効率化の限界(平成15年) | 信州大学医学部付属病院 西村チエ子、西原三枝子 | 成人看護学 深澤佳代子 | 病院の健全な運営をしていく上では、効率性と患者の安全性に主眼を置かなくてはならない。特に外科治療の中心となる手術室の効率的稼動について1施設におけるベッド数、患者数、看護師および麻酔科医などの人力的な因子を加味し、現状で安全性が確保されるための効率化の限界について手術件数の試算をもとに検討した。患者の安全性を維持しつつ、手術件数を効率的に上げていくためには、年間の稼動日数の増加や人員の増員が必要であるが、状況的に困難な場合が多い。日本の現状では、各施設の稼動状況などの資料が公になることは殆どなく、他施設の状況を参考にすることはなかなかできない。今後、各施設が効率的な運用を行っていくためには、今まで公表しなかった各施設のデータを互いに公表しつつ、ベンチマーキング、ベストプラクティス等の手法を取り入れていくことも重要である。 |

| 番号 | 研究課題 | 共同研究施設 | 実施教員所属・氏名 | 研究目的・方法等 |
|----|--|---|---|--|
| 29 | ITを活用した継続医療・看護ケア(ヘルスケア)の有効・効率的なプランニングの研究(中間報告)(平成15年) | 服部外科医院、服部 伸、杉田 医院、杉田 玄ほか | 成人看護学 加藤光寶、深澤佳代子 看護基盤科学 吉山直樹、橋本 明浩、大友康博 小児看護学 加固定子 | 本学看護研究交流センター「豪雪地帯における高齢者の居宅での保健医療福祉サービスの効果的提供」における研究であり、デジタルカメラ付き携帯電話を利用し、簡易な在宅ケア連携システム構築試行に関する研究の中間報告である。訪問診療を行っている患者のうち、訪問看護を要する患者約40名を対象に、訪問診療医師とヘルスケア提供者9名とでデジカメ携帯電話を用いた情報交換を試みた。情報交換数61件中、静止画像では診断や経過を十分判断できる情報を得ることができ、患者にも適切かつ迅速な対応が出来る等の効果が得られた。しかし、文字記述(メール)による情報交換は、即時対応に時間を要する等の問題が残り、今後検討が必要である。 |
| 30 | 新潟県における精神障害者ホームヘルプサービスに関する研究 | 国立病院機構丸田明美、清水美和子、小林朗子、山岸裕子 | 精神看護学 富川孝子、俊成 晴奈 | 精神障害者ホームヘルプサービスは3年間の思想的事業を経て平成14年4月から本実施になった。本研究では、市町村の事業報告を分析し、県内の精神障害者ホームヘルプサービスの現状と課題を明らかにした。 |
| 31 | 継続看護における連携システムの構築:療養病棟患者の退院後の在宅ケアを効果的に継続させるための退院指導に関する研究(H14・15年度) | 上越地域医療センター病院: 宮島ひろ子、小 熊波重、矢澤紀子、樋口あきみ、萬場知子、瀧澤 由佳、高橋恵子、梅澤美紀子 | 老年看護学 田中キミ子、北 川公子、柏木夕香、唐澤千登勢 | 高齢者が退院後在宅で日常生活に適應でき、自立し、不都合のない生活を送ることが可能な要因を探索し、地域ケアシステムとの連携を促進させるための効果的な退院指導を検討するために、対象者:自宅退院した患者53名を対象とした調査と、療養型病棟の入退院状況と退院後の在宅ケア内容、及び介護者の状況調査を実施した。 |
| 32 | 看護学生の喫煙行動および喫煙に関する意識と喫煙防止教育のあり方(14年度) | 山元智穂、関島 香代子 | 地域看護学 斉藤智子 看護基盤科学 杉田 収 | 看護学生の喫煙行動、意識、喫煙防止教育の実態を明らかにして今後の喫煙防止教育のあり方を検討することを目的に看護学科1-3年、専攻科生合わせて368名に質問紙調査を実施した。喫煙率は9.3%、習慣的喫煙者は31名だった。タバコの害の認識は高く家庭や社会での禁煙対策の積極的な取り組みを実施すべきと考えていた。喫煙者は非喫煙者と比較して喫煙を肯定的にとらえていた。喫煙の防止教育を受けた経験学生は約8割で、喫煙行動や意識は喫煙防止教育の有無には関連していなかった。今後の喫煙防止教育のあり方に示唆を与えた。 |
| 33 | 山間豪雪地帯における高齢者の生活構造とソーシャルニーズに関する研究(平成14年~16年) | 横尾加奈江、外 立直子 | 地域看護学 佐々木美佐子、小林恵子、平澤 則子 飯吉令枝、斉藤 智子 吉山直樹 | 豪雪地帯と少雪地帯における高齢者の健康と生活構造及びソーシャルサポートニーズの傾向を明らかにしてソーシャルサポートのあり方を検討した。豪雪地帯は地域全体の高齢化が進み高齢者が地域の中でも現役でいる必要性が高い。「雪の処理」の実施率、ニーズとも高く気がねなく使える公的サービスの確保が必要であることやその他必要とするサポートは「送迎」が高くボランティアの育成や利用しやすい交通手段の検討が必要であることが示唆された。 |
| 34 | 農村地域の高齢者の生活構造とソーシャルサポートニーズに関する研究(平成14、15年) | 長沼典子、丸山 光子 | 地域看護学 佐々木美佐子、小林恵子、平澤 則子 飯吉令枝、斉藤 智子 | 農村地域の在宅単身の高齢者と高齢者のみ世帯を対象に冬期間における高齢者の健康度、活動能力、生活構造について把握しソーシャルサポートニーズを明らかにすることを目的とした。活動能力は全体で低く、特に後期高齢者と一人暮らしの者は低く、状況対応は女性が低かった。生活行動では「バスに乗って一人で外出する」や社会活動の実施率は低くソーシャルサポートニーズは「電球の交換・電気製品の手入れ」「除雪」「病院・医院への受診」という項目が約2割であった。生活スタイルに合わせた多様なサポート・サービスの構築が必要であることが示唆された。 |
| 35 | 介護・看護から見た住宅評価法(15年度) | 室岡耕次、大竹 朗、杉田靖子、水嶋和美 | 地域看護学 佐々木美佐子、小林恵子、平澤 則子、飯吉令枝、斉藤 智子 杉田 収 | 介護保険制度スタート以来、介護保険のサービスのひとつである住宅改修は種々の問題点が指摘されている。研究会の住宅評価を受け入れてくれた新築2例、改築住宅の4例の実践例について、建築士、理学療法士、保健師、福祉住環境コーディネーター等の3職種以上の専門家の評価チームが訪問して住宅評価を実施した6例から成果や問題点を提起した。 |

| 番号 | 研究課題 | 共同研究施設 | 実施教員所属・氏名 | 研究目的・方法等 |
|----|-------------------------|--|--------------------------------|--|
| 36 | 上越地域における中高年女性の健康課題の分析 | 上越市役所健康づくり推進課、金子一郎、中村、大橋芳子、小林奈緒子、新保美咲 | 看護基盤科学 野地有子、飯吉令枝、朝倉京子、中島紀恵子 | 上越市女性職員および健康推進員を対象に、女性の健康とセルフケアに関するアンケート調査を実施した。上越市女性職員1004名のうち、有効回答748名について分析した結果、セルフケアでは「健康管理への関心」の得点が高く、具体的なアプローチの必要性が示唆された。セルフケアとQOLのいくつかの領域には関連がみられ、その中でも「サポートの獲得」は、QOL全領域と関連があることが明らかになった。QOL向上のためにも「サポートの獲得」などのセルフケア能力を高めていくことが大切である。 |
| 37 | 上越まちの保健室開設にむけたアクションリサーチ | 上越市役所健康づくり推進課、金子一郎、中村、大橋芳子、小林奈緒子、新保美咲 新潟県看護協会、望月綾子、中野裕子 | 看護基盤科学 野地有子、飯吉令枝、朝倉京子、中島紀恵子 | 女性の健康づくりを支援するエビデンスの構築、地域の看護提供システムの新たな構築、という2つの課題を、日本看護協会による「まちの保健室」を企画・運営することによりアクションリサーチで取り組むことを目的とした。主催看護大学、県看護協会と市健康増進推進課の共催により、市民プラザにおいて月2回実施することになった。5ヶ月間の準備期間の後、平成16年5月15日に第1回を開設し、これまでに10回実施し利用者総数は120名であった。倫理的配慮として、利用に先立ち研究承諾書に署名を依頼している。利用満足度は95.6%と高い。看護職ボランティア17名、学生ボランティア15名であり、今後はサービスの質の向上および、結果評価に結びつくアクションリサーチへの展開が期待される。 |